

主人公が演じた「働く」という行為

—夏目漱石『門』・村上春樹『スプートニクの恋人』をめぐって—

范 淑 文*

1. はじめに

漱石文学の主人公がよく高等遊民として設定されているのは贅言するまでもないことであるが、中でも殊に、『それから』の代助の場合は小説のモチーフにダイレクトにつながるほど鮮明に高等遊民色が濃く描かれている。次の作品『門』を含め漱石の初期三部作として読むなら、それまで父親の仕送りで高等遊民として生活してきたがいわゆる「自然」を全うするために社会に妥協し、仕事を探すことを思い立った代助のその後の行方は、『門』の宗助にある程度託されていると見なしてもよからう¹。そのような文脈の流れにある『門』の宗助がどのように御米のために、二人の生活を支えるべく働くのかは興味深いところである。

これとは別に、漱石没後約80年に活躍している村上春樹の作品には漱石のそれとは内質には違いますが、就職に背を向ける若者を主人公として登場させる作品が存在する。『スプートニクの恋人』がその一つである。すみれという主人公は、大学を中退して小説家を目指そうとしながら、作品が一つも書けなかった。ところが、ある事がきっかけで作家になるのを諦め、OLになったというユニークなキャラクターである。そのようなすみれはどのように社会を生き、そしてOLに変身したのかそのプロセスも意味深い。

拙稿では、両作品の主人公がどのようにその「働く」を演じているか、どのように「働く」者

に変身するのか、それぞれの「働く」は作品にどのように位置づけられているかなどを明らかにすることを試みたい。

2. 『門』に語られている「働く」

言うまでもなく、主人公宗助と御米二人の過去の「罪」に重点を置く理解が『門』の通常の捉え方²である。それを踏まえて、「安井を裏切った罪の男女の「奇妙な運命」を「門」の本質的なモチーフだと僕は考えない。」という内田道雄説³や「『罪』の物語でなく、「罪」の回避の物語である」⁴という江藤淳説、深江浩の「不安」説⁵など、その「罪」の持つ意味を更に深く掘り、主人公の姿勢や心理に焦点を合わせた見解⁶が続出している。また、作品における宗助の仕事の無意味さに言及する瀬沼茂樹の論究⁷も挙げられる。

前述したように、『門』を漱石の前期三部作として読むなら、『それから』の代助が仕事探しに思い立ったあの最後の名場面を想起し、その後の代助の行方—『門』の宗助の仕事—に誰しもが興味を持つだろう。

2.1 語られていない宗助の仕事振り

さて、友人の斡旋で福岡から東京に引越し、東京の役所で仕事をしている宗助は仕事場でどんな仕事に携わり、どんな仕事振りなのかが、気になる。宗助の出勤関連箇所を以下に抜粋しておこう。

- ・宗助は朝出て四時過に帰る男だから、(一)
- ・毎日役所へ出ては又役所から帰つて来た。

*国立台湾大学教授

(四)

- ・宗助は役所の帰りに、番町の叔母の所へ寄つて見た。(中略)夜は近所の縁日へ御米と一所に出掛けた。(四)
- ・翌日眼が覚めて役所の生活が始まると、宗助はもう小六の事を考へる暇を有たなかつた。家へ帰つて、(後略)(四)
- ・役所へ出てゐても能く御米の事が気に掛つて、用の邪魔になるのを意識する時もあった。(六)
- ・次の日宗助が役所の帰りがけに、電車を降りて横町の道具屋の前迄来ると、(後略)(九)
- ・宗助は例刻に帰つて来た。(十一)
- ・役所では用が手に着かなかつた。(中略)宗助はたゞ早く帰りたかつた。(十七)

やや長くなつたが、上掲の宗助の出勤関連の描写や春に行われたリストラで宗助は「生き残つた」、しかも月給が五円上がったという終盤の語りなどからでは、宗助は基本的には遅刻もしない、仕事能力もそこそこできるサラリーマンだと言える。が、一方、「例刻に帰つて来」ることや、「用が手に着かな」い姿、また「早く帰りた」い、「官吏の増俸問題」「局員課員の淘汰」以外に仕事の内容には一切触れない、などの仕事態度の描写からは、宗助は役所の仕事に熱心であるどころか、全然関心を持っておらず、単なる生計を立てるための労働を提供してその報酬をもらうという労資関係に留まっているというしかない。つまり、仕事場との関わりを必要最小限に抑えているのは明らかである。のみならず、『門』の特に前半は、日曜と土曜の午後の時間で小説が構成されていると言ってもいい。⁸という石原千秋の指摘の通り、後半の宗助の参禅を除いた物語の大半は、宗助が御米との日々の暮らしや大家との付き合い、つまり仕事場以外の場面で構成されている。厳密に言えば、石原千秋が言う「日曜と土曜の午後」だけではなく、退勤後の平日の夜や朝の時間も含まれている。更に「出勤に出掛けた」という淡々とした表現の次

に御米の様子に焦点を合わせたり、またすぐ帰つて来る場面に切り替えたりするのが目立っている。役所にいる宗助の描写は、家にいる御米の様子を案じている、仕事が手につかない不安の様子、などの語り止まりに止まっており、それ以上の描写は見当たらない。これは、語り手が意図的に宗助の働き振りに対して口を噤んでいるとしか思えない。

このように、役所に勤務しながらもその様子が全く語られていないことについて、西垣勤は「これは毎日弁当持参で役所に通う下級官吏のわびしげな感想に過ぎまい。」「役所仕事は食うためだけのものであり何の意義もない」⁹と、宗助の役所勤めに厳しい批判を下している。繰り返しになるが、『それから』の代助—政府官吏と関わって儲けようとしていた父親を批判していた代助—のその後の成りの果てとして、『門』の宗助を見なせば、一番嫌がっていた役所(官僚によって汚されている場所)で働かされるのは、宗助と御米が犯した「罪」の一種の償いとも捉えられる。しかし、一方では、そのような苦境に置かれている宗助にその仕事場での人間関係に煩わされないで済むように、代わりに家で御米と労わり合う時間をたっぷり与えることで宗助を労っている語り手の温かみも窺える。とはいえ、役所に背を向けている宗助は「来年度に一般官吏に増俸の沙汰がある」「その前に改革か淘汰が行はれる」と、さり気なく官吏の「増俸」と平社員のリストラの噂を語るのは、『それから』の代助ほど辛辣ではないが、それでも批判の姿勢を構えているのは明らかであろう。但し、『門』では、宗助の場合、仕事を程々にこなせる安月給の一サラリーマンの心細い姿がありありと描かれている。活気が一切感じられないし、寧ろ憐れな平公務員の姿がクローズアップされている。

2.2 語られている家での「働く」

役所での宗助の仕事振りは殆ど語られていない代わりに、宗助が出掛けた後の家の様子がよく語られている。それが最も鮮明なのは、宗助が叔母

のところから貰って来た父親が残してくれた抱月の絵が描かれている屏風を御米が売ろうと図り、古道具屋を訪れる場面である。

広島以来かう云ふ事に大分経験を積んだ御蔭で、普通の細君の様な努力も苦痛も感ぜずに、思ひ切つて亭主と口を利く事が出来た。(中略)「可うがす。ぢや後程伺ひませう。今小僧が一寸出て居りませんからな」(六)

宗助が役所に行った後、「不断着の上へ、妙な色の肩掛とも、襟巻とも付かない織物を纏つて外へ出た。」との描写から、御米は何の迷いもなく、軽い気持ちで古道具屋に向った様子が想像できよう。普通なら、男の人にとっても質屋に等しい古道具屋には入りづらいものだが、御米は生活のために広島に住んでいた時より、何回も質屋に入りにしていた経験を積んだお蔭で、古道具屋に入るのを苦痛とも思わないし、古道具屋の亭主と気楽に「口を利く」ことが出来たのである。用事で出掛けていた小僧が店に戻って来てから、亭主は御米の家を訪れ、屏風を見た後、六円を出すと云ったが、一円でも多く貰いたい御米は暫く躊躇してから、「でも、道具屋さん、ありや抱一ですよ」と答えた。その実、抱一がどれほどの価値があるのかはつきり分らない御米はその場では屏風を手放さなかった。古道具屋が三度目に足を運んだ時に、ようやく三十五円で屏風の売買が成立した。宗助の役所への勤務や退勤が単なる時間の印しとして淡々と語られるが、一方その後、町へ赴き、古道具屋に入り、店の亭主と商いの交渉などをする御米の動きが常に語りの焦点とされている。

屏風売買以外に、御米が焦点とされているのは、小六と障子の張替えに取り組んでいる場面である。

「小六さん、茶の間から始めて。夫とも座敷の方を先にして」と御米が聞いた。

小六は四五日前とうへ兄の所へ引き移つた結果として、今日の障子の張替を手伝はなければならない事となつた。(八)

第八章の冒頭に行き成り、小六への御米の発話

から始まっている。御米の提案で宗助夫婦が弟小六を引き取ることになり、小六が引越してきた四、五日後の朝、御米が小六と障子の張替えに取り組んでいる場面である。宗助が役所に出掛けた後の家の様子が焦点となつて語られている。御米が気を遣いながら、小六と一緒に障子の張り替えの仕事に励んでいる様子以外に、「この小舅と自分の間に御櫃を置いて、互に顔を見合せながら、口を動かすが、御米に取つては一種異な経験であつた。」という、それまで夫以外の人と膳を共にすることのなかつた御米がそのような状況に置かれた苦しさ、神経を使う辛さが細やかに語られている。

御米が小六と共に過ごした障子張替えの昼間には宗助は全然登場してこない。「平日が男(労働者)が主役の空間なのに対して、日曜の都市は女/子供(消費者)が主役の空間なのである。」¹⁰という、石原千秋の都市の平日・休日の論説にはこの場面は当て嵌まらない。役所に働きに行っているこの家庭の生産者である宗助は現れていないが、逆に、休日の「消費者」と称される女である御米が家に居ながら労働者一心身とも懸命に働いている正真正銘の労働者一の姿として捉えられ、その動きが隠さずに語られている。

屏風売買の御米の本領を合せ考えれば、男性描写が堪能で、そこに常に力を注ぐ漱石にしては、『門』における主人公と仕事の設定は異例であると言えよう。御米の屏風売買が一種のビジネス能力のように見なされ、そして障子の張替えなどの家事に励んでいる女性の「働く」も男性に劣らないほど、家庭における重要な女性の存在は正に生産者同等のものと思なすべきだという漱石の眼差しが『門』では窺えよう。

3. 村上春樹『スプートニクの恋人』に織り込まれている「働く」

小説家になろうと決心したすみれは、面白くない大学を中退して唯一の友達である「ぼく」を相

談相手として時々夜中に長電話をするが、「ぼく」を異性として全く感じていない。一方、小学校の教師である「ぼく」の方は、何人かの女性と関係を持ちながら、すみれのことをいくら話しても飽きない、「誰よりもなによりも大事な人間」(P293)とと思っている。このような状況のすみれは、ある日、在日韓国女性企業経営者のミュウに出会ってから、「生れて初めて恋に落ちた」(P7)。それまで仕事をした経験のないすみれは、ミュウに誘われてミュウの会社に入ってOLになった、というのが『スプートニクの恋人』の前半の粗筋である。

さて、それまで「ぼく」以外に友達がいなかった、否、正確に言えば、社会との繋がりを拒否し続けていたすみれが、最も典型的な一社会人としての生き方に切り替えた背後には相当の誘因があるのは推測できるだろう。すみれの身の上や心理などがどのように変わったのか、その仕事振りに焦点を据えながら、明らかにした上、すみれの「働く」の持つ意味にアプローチしてみる。

3.1 OLになったすみれ

すみれとミュウは披露宴で知り合った。父親が経営していた貿易会社を13年前に長女であるミュウが引き継いでおり、ミュウがすみれに自分の仕事について話したり、すみれの能力や性格について聞いたりしたあと、自分の会社で働くようにすみれを誘った。話はトントン拍子に進み、英語とスペイン語が堪能なすみれはミュウの会社で働くことになった。すみれはそのことを唯一の友達である「ぼく」に伝えたくて、「ぼく」と久しぶりに喫茶店で会った。別人のように変わったすみれの様子に「ぼく」が驚いた。その様子や、仕事に合わせる為のすみれの諸変化などを昔のすみれと比較する便宜上、次の表1に列挙してみる。

表1

本来のすみれ	就職後変身したすみれ
髪を孤児みたいにくしゃくしゃにした。口紅や眉ペンシルを手にしたことはない。	髪はクールなショートカットにまとめられている。
ブラジャーにサイズがあることさえ知らない。	ネイビーブルーの半袖のワンピース
左右合わない靴下をごまかして穿いている。	靴は中くらいの高さのヒールで、黒いエナメル。ストッキングまで穿いている。
料理は作らないし、掃除もだめ。	どんな些細なことでも全力を尽くした。
ひっきりなしに煙草(マルボロ)を吸う。	煙草をやめようと決心した。
社会的常識と平衡感覚を身につけていない。	通勤電車に乗る。
小説を書くこと以外の人生は考えられない。	小説は書かなくなった。

上掲の表から、ミュウの会社への就職が決定してから、すみれがすっかり変ってしまったことは明らかであろう。就職する前は、髪に櫛も通さないし、口紅も「眉ペンシル」などの化粧品も知らず、「ブラジャーにサイズがあることさえ知らない」という、社会における女性一般の有り方や振る舞いを全く意識しない、「世間知ら」ずな女性であった。しかし、OLになったすみれは、表1の右側にあるとおり、「クール」な感じの「ショートカット」のヘアスタイルに変わり、「ネイビーブルーの半袖のワンピースの上に、薄いカーディガンを羽織る」、しかも「中くらいの高さのヒールで、黒いエナメル。ストッキングまではいている」女らしい姿に変身してしまった。更に、ヘビースモーカーだったすみれは煙草を止め、週に三回出勤し(経済的に考え「来月から週に五日間働くことにする」と「ぼく」に話す)、そのため電車に乗るように頑張っている。つまり、頭から足までの着こなしなどの外見のみならず、生活習慣、更に人生の目標まで著しく変わったのである。そのようなすみれの身の上の変化に「ぼく」は驚き、「以前のすみれとはべつの世界に属している人間

のように見えた。」(P94)と語っている。

言い換えれば、すみれは一般に言う社会性に欠けた存在の女性から、社会性をそのまま反映している女性に変身しているのである。それらは凡て、すみれのミュウへの憧れ、完全にミュウの虜になっていること、ミュウへの愛の証であり、すみれは自分を徹底的に変えてしまったのである。ミュウに対する愛のためにすみれはそれまでの我を潰し、社会制度の枠に嵌められている会社という組織に迎合し、自らそれらの規範で自分を縛りつけたのである。

「最後、すみれは、いわば母なるものに拒絶されていることとなります。」¹¹と加藤典洋が指摘したように、すみれの母親の象徴であるミュウ＝母親に「拒絶」された解釈ができるだろうが、ミュウに対するすみれの愛は身を滅ぼしても惜しくないほど激しいものであったには違わない。

3.2 経営者としてのミュウの働き振り

『スプートニクの恋人』ではすみれ以外に、ミュウの働き振りも見落としてはなるまい。男性中心というイデオロギーが容易には抜けられない日本社会では、女性が仕事場で男性と平等に働くのは容易いことではない。況してや女性が会社を経営し、しかもヨーロッパという先進国へ自ら取引に赴いたりするのは極めて異例であろう。フランスなどのヨーロッパの国よりのワインの輸入から国内の専門店へのおろしまで、またクラシック音楽の演奏家の招聘などが彼女の主な仕事の内容である。ワインの仕入先や音楽家のスカウトなどに彼女は積極的に携わるのである。有能な女性実業家であるその姿が容易に想像できるだろう。

すみれとミュウの恋に視座を据えて作品を読むと、「ミュウが本来の意味でのメディア（medium＝巫女）としての役割を果たしている。すみれは、「こちら側」と「あちら側」に「同時に密接に含まれ、存在している」と自分を定義していた。」¹²、作品におけるミュウの役割、すみれとの

関係として捉えることができよう。が、バリバリと仕事をしているキャリアウーマンとしてのミュウの姿はどんな意味を持っているだろうか。(1) まず、女性経営者というのは男性中心の日本社会に対する一種の対抗意識が働いていると考えられよう。女性が男性に依存しないのみならず、立派に外国との取引をこなしている。(2) 更に、14年前の「観覧車事件」以来、誰とも肉体関係を持たないミュウは結婚していながら夫とは性関係を持たない、週末に顔を合わせるだけの夫婦関係とは、従来の倫理観を覆している。そのような仕事場での地位に支えられたが故、夫婦の形を自ら決定することが許されたのではなかろうか。

4. 結び

80年間ほど隔たってはいるものの、夏目漱石の作品にも村上春樹の作品にも仕事に背を向ける主人公が登場している。小稿では、漱石『門』及び村上『スプートニクの恋人』を取り上げ、それぞれのキャラクターの「働く」を考察した結果から、二人の作家とも以下のように意外に女性の労働に目を向ける姿勢がうかがえる。

・『門』の場合：

(1) 仕事場に背を向けるサラリーマン

二人の生計の大黒柱のように毎日役所に宗助が出掛けると設定されているが、「役所へ出掛けた」後、語り手が家に焦点を合わせて語る形式が目立っている。宗助の「働く」が意図的に省かれているのは即ち、職場に宗助が背を向け、宗助にとっては役所の仕事は労働力の提供と報酬の支給という労資関係しか成り立たない。また、終盤の「官吏の増俸」「局員課員の淘汰」という宗助の吐露もそうした役所への批判と見なすこともできよう。

(2) 家庭主婦の「働く」へのクローズアップ

一方、男性中心の日本社会では家庭主婦の動きにライトが当てられないのは常であるが、『門』では宗助が出勤後の家の様子、御米の動き、殊に

屏風の売買をめぐる古道具屋の亭主との交渉が鮮やかに描かれている。女性の活躍する姿や家事で一家の円満を図る主婦の心身の苦労のクローズアップによって、漱石の女性への眼差しを珍しく感じ取ることができる。

・『スプートニクの恋人』の場合：

(1) OLになったすみれ⇒組織への迎合

社会とのかかわりをずっと拒んでいたすみれがミュウの会社での就職によって、外見も生活習慣も社会の規範に合わせ、完全なOLに変身した。それは一見社会とリンクしたようにみえるが、それは、恋の相手であるミュウへの献身的な行為—我を潰すまでの犠牲—であり、期待に応えられないと断念した時点で、すみれは再び社会とのかかわりを遮断し、姿を消してしまったのである。そのOLに変身したすみれの姿から、社会という組織で働こうとする女性は我を抑え、様々な規範に否応なしに従わなければならないという日本社会の一現象も窺えよう。

(2) ミュウの「働く」⇒日本社会への対抗

一方、男性に負けないほど仕事に励んでいる経営者として登場するミュウの働く姿は男性中心の日本社会への対抗意識の反映とも捉えられよう。そのような自立、社会的地位によって、ステレオタイプの夫婦関係を覆すことにも繋がるだろう。

80年間ほど時代が変わったが、『門』にも『スプートニクの恋人』にも女性の生き方、日本社会における女性の存在に更に眼を注ごう、という両作家の眼差しが偶然にも一致している。正に日本社会、殊に現在の日本社会が直面し、解決を急がねばならない「働く」という社会問題に漱石、村上春樹はいち早く気づいていたのであろう。

注

- 1 例えば、片岡良一は「とにかく作者はこの作に描かれた主人公夫妻の生活を、『それから』からの制約に従って、彼等の犯した罪故明るい社会の外側にはみ出した、暗くわびしいものとしている。」と『門』と『それから』の関連性に言及している。

(『門』『漱石作品論集成 第7巻』編者：赤井恵子・浅野洋1991 桜楓社P9) 一方、『門』と『それから』をそれぞれ独立した二作として見なしている西垣勤説もある。(西垣勤『門』『漱石作品論集成 第7巻』)

- 2 小宮豊隆『漱石と芸術』1973岩波書店
- 3 内田道雄「『門』をめぐる一夏目漱石論(二)」『漱石作品論集成 第7巻』P25
- 4 江藤淳「『門』一罪からの遁走」『漱石作品論集成 第7巻』P19
- 5 「他方は人員整理問題、小六の問題が夫婦の物質的生活に与える影響として、親和と飽満の愛の世界の背後にたえず不安のトーンを響かせている。」深江浩「『門』論」『漱石作品論集成【第七巻】』P92
- 6 他には、「彼らが住んでいる場所は、内なる植民地なのではないのか。」とあるように、主人公の生活態度や空間を一種の「植民地」の隠喩とする捉え方もある。(押野武志「『平凡』をめぐる冒険『門』の同時代性」『漱石研究17号』編集：小森陽一・石原千秋 2004 翰林書房P39)
- 7 瀬沼茂樹「『門』」『漱石作品論集成 第7巻』
- 8 石原千秋「〈家〉の不在——『門』論」『漱石作品論集成 第7巻』P239
- 9 西垣勤「『門』」『漱石作品論集成 第7巻』P39
- 10 前掲石原千秋「〈家〉の不在——『門』論」P240
- 11 加藤典洋「行く者と行かれる者の連帯—村上春樹『スプートニクの恋人』」『村上春樹論集②』2006 若草書房P185
- 12 柘植光彦「円環／世界／メディア——『スプートニクの恋人』からの展望」『村上春樹スタディーズ05』栗坪良樹・柘植光彦編 1999 若草書房P35、36

テキスト

『漱石全集』全28巻1993～1999、岩波書店
村上春樹『スプートニクの恋人』2008、講談社

参考文献

- 石原千秋「〈家〉の不在——『門』論」『漱石作品論集成 第7巻』編者：赤井恵子・浅野洋、1991、桜楓社
石原千秋「書き出しの美学(最終回)「こちら側」の自分はいつも孤独—村上春樹『スプートニクの恋人』」『本が好き』37号、2009、光文社
内田道雄「『門』をめぐる一夏目漱石論(二)」『漱石作品論集成 第7巻』編者：赤井恵子・浅野洋、1991、桜楓社
江藤淳「『門』一罪からの遁走」『漱石作品論集成

- 第7巻』編者：赤井恵子・浅野洋、1991、桜楓社
押野武志「『平凡』をめぐる冒険 『門』の同時代性」
『漱石研究17号』編集：小森陽一・石原千秋 2004、
翰林書房
片岡良一「『門』」『漱石作品論集成 第7巻』編者：
赤井恵子・浅野洋、1991、桜楓社
加藤典洋『村上春樹論 イエローページ PART 2』
2004、荒地出版社
加藤典洋「行く者と行かれる者の連帯——村上春樹
『スプートニクの恋人』」『村上春樹論集②』2006、
若草書房
小宮豊隆『漱石と芸術』1973、岩波書店
瀬沼茂樹「『門』」『漱石作品論集成 第7巻』編者：
赤井恵子・浅野洋、1991、桜楓社
柘植光彦「円環／他界／メディア——『スプートニ
クの恋人』からの展望」『村上春樹スタディーズ
05』栗坪良樹・柘植光彦編、1999、若草書房
西垣勤「『門』」『漱石作品論集成 第7巻』編者：赤
井恵子・浅野洋、1991、桜楓社
深江浩「『門』論」『漱石作品論集成【第七巻】』編者：
赤井恵子・浅野洋、1991、桜楓社